渡嘉敷ペークー話

沖縄・豊見城の笑話

を公刊している。 追跡調査、またそれ以外の調査をも行って、いくつかの調査報告と論文® 戦に際し、激戦地となって多くの犠牲者を出したことも付けくわえてお つねに那覇・首里の中央と南部をむすぶ重要な地でもあった。 氏時代を通じ、また、つづく第二尚氏の王府時代には豊見城間切として、 出城である豊見城 城を擁していた。三山統一(一四二九年)後、第一尚 を挙げている。その後著者はこの仕事を受け継ぐこととなり、資料整理、 行われ、二十世紀も十年を残すのみのこの時期としてはまずまずの成果 元) と一九九〇年 (平成二) の夏、二度にわたる民間説話の集団調査が かないわけにはゆかない。 いまをさかのぼる十数年の一九八九年 (平成 まず、群雄割拠の三山時代 (十四世紀初~)、この地は南山に属してその ゆく観がある。長いあいだほとんど日本最大の村として存続していたが、 に大都市の様相を示してきた那覇市に隣あい、豊見城市も急速に変わり 市の北側に位置し、 |○○二年四月、ようやく市となったのである。歴史をふりかえれば、 豊と 見み 【城 市は、沖縄本島南部、那覇市のすぐ南、そして最南端の糸満(ヘテャヘ 都市と農村の性格をあわせもつ町である。 あの沖縄

察である。うち、「笑話」としての性格をもつ「渡嘉 敷 ペークー」についての考うち、「笑話」としての性格をもつ「渡嘉 敷 ペークー」についての考が、本稿は、前述の集団調査によって得られた豊見城の民間説話資料の、今回、いまだやり残している仕事の一部をまとめておくことにしたい

渡嘉敷ペークー話

中村史

(難題型) の話型に相当するものである。そして、この「薩摩の難題」を が強いのだ。本土の方に類似の例を求めるならば、高僧の一休などがそ ているのだからきわだって高く、また、公的な世界の人物としての性格 ードといったかっこうである。そのような意味でも、モーイ親方は、古 の「狡猾者」たちと、同様の性格・傾向をもつ。これに対して、渡嘉敷 公たち、熊本の彦一(彦市、彦八)、大分の吉右衛門 (吉四六、吉吾) など の失敗を招いたり、また他人に嫌われたりする。本土の狡猾者譚の主人 公のひとりと言うべきだが、ときとして悪知恵が過ぎ、そのために自ら れに当たるだろう。それに対して、勝連バーマは「狡猾者譚」の主人 に比較して、その立場も「王子」「按司」につぐ士族の位、「親方」を得 はたらき」をつかさどる神童に最も近い。 勝連バーマや渡嘉敷ペークー 代の英雄神話の主人公の末裔であり、柳田国男の言うところの「知恵の ているモーイ親方の小話的話群が存在している。 ちょうど英雄のエピソ とりまいて、「煙草は一回」「下駄と草履」「嫁釣り」などと名づけられ は柳田国男が「完形昔話」「知恵のはたらき」の部に入れた「姥捨山」 方は琉球の国難を救う「薩摩の難題」の主人公である。「薩摩の難題 沖縄の「頓智話」「笑話」の世界で有名な三人の人物は、モーイ親方、

い。 の御伽衆であったと言われる曾呂利新左衛門などにも近いわけであろう の御伽衆であったと言われる曾呂利新左衛門などにも近いわけであろう がるものであるから、むしろ「御伽衆」のような存在なのである。秀吉 がるものであるから、むしろ「御伽衆」のような存在なのである。秀吉 がるものであるから、むしろ「御伽衆」のような存在なのである。 であるがは「王様」お気に入りの家来であり、話し相手、遊び相手にも は、渡嘉敷ペークーの場合はいわばプロの咄家ということにもなるのだ である。また、彦一、吉右衛門のような毒気、悪どさはない。ある意味で「おどけ者」の名がよりいっそう の御伽衆であったと言われる曾呂利新左衛門などにも近いわけであろう がるものであるから、むしろ「御伽衆」のような存在なのである。 である。また、彦一、吉右衛門のような毒気、悪どさはない。ある意味で「おどけ者」の名がよりいっそう

ぎのようなものである。 を参照してみよう。年紀の点に矛盾があるものだが、要約して示せばつ いう書物に渡嘉敷ペークーの伝記風の記事を載せているので、 ように思われるのである。たとえば、真栄城兼 良 氏編『北谷村誌』との風土のせいなのか、本土の頓智者たちの場合にくらべていっそう強い かも、その実在性は、 敷ペークーもまた、琉球の歴史上に実在した人物だと言われている。 ろうか。本土の頓智話の場合にもしばしば、それらの主人公たちがかつ 信じさせる環境のなかで語られる。それらのうちには、たしかに実在の 在したり (吉右衛門) して、聞き手にそれらが実在の人物であることを 吉右衛門、高知中村の泰作、広島の越原左衛門)、子孫と言われる人々が存 て実際に生きていたと伝承され、その墓なるものが残っていたり(彦一) 咄の者」を核として成長していった場合があったかもしれない。 そこで、実際のところ、渡嘉敷ペークーとはいったいだれだったのだ なにごとも事実と歴史に帰せしめようとする沖縄 まずそれ 渡嘉

の渡嘉敷兼倫の三男として生れた。 童名は思亀、和名は兼副、ペークーは尚敬王の三十一年、寛保三年(一七五〇)、首里赤田村の

「名島」を与えられ、渡嘉敷の姓を真栄城に改めた。同王の十七年 謡 年、天保十二年(一八四一)、九十一歳のとき北谷間切真栄城の年、天保十二年(一八四一)。 録されていた。船手の役職を辞して北谷間切桑江之前に隠遁したの録されていた。옯煌て 所望されて奉り褒賞を賜わったこともしばしばであると家譜にも記 った。多芸多才な諧謔家であったので王や王子に寵愛され、 どの職を勤めたが、二十七歳のとき玉川王子が鹿児島に上るのに随 唐名は葉絹烈であった。 弘化一年(一八四四)、九十五歳で世を去った。(要約) ちにも、尚灝王をはじめとする貴人の訪問があった。尚育王十四 のちには尚穆王の世子・尚哲の仮右筆となり、つづいて和右筆とな 行した。そして、かの地で、七年のあいだ和文、 謡取調役として江戸上りをするなどの功績があった。 剣道、茶道など諸道の修行にはげむ機会にめぐまれた。 父の兼倫は尚穆王の右筆、 和歌、書道、 兼副は花当な 主取を勤 帰国の

四

によれば、ペークーは「わたしの子孫に馬鹿なことをするのは出なたということであり、彼の父も彼自身も「兼」の字を名乗頭(和名の頭)たということであり、彼の父も彼自身も「兼」の字を名乗頭(和名の頭)におってにわる渡嘉敷・ボさんという方、明治十三年(一八八〇)年生また、ペークーの子孫だと言われている。したがって、この記事のよられるということがごく一般的なこととしてあるのだ。いまの場合にもまかに、「渡嘉敷兼……」あるいは「真栄城兼……」という姓と名乗頭をかる語り手 渡嘉敷兼……」あるいは「真栄城兼……」という姓と名乗頭をかる語り手 渡嘉敷兼がある。たとえば、ペークーの子孫だと自ら言う、たということであり、彼の父も彼自身も「兼」の字を名乗頭(和名の頭)によれば、渡嘉敷・求さんという方、明治十三年(一八八〇)年生また、パークーの子孫だと自ら言う、ある語り手 渡嘉敷兼がある。たとえば、ペークーの子孫だと自ら言う、たということであり、彼の父も彼自身も「兼」の字を名乗頭(和名の頭)をということであり、はいうなどのである。いまのは出ない。「東京教養の人物がある。たとえば、ペークーの子孫だと自ら言う、ある語り手 渡嘉敷・求さんという方、明治十三年(一八八〇)年生また。「東京教養・「東京

- ク- を直接知っているという人からさまざまな話を聞かされていたの 獄などに入れられて罰を受けた人はその子孫にはいなかった しかし、そこに彼の多面的性格のすべてがうかがえるとは言えないよう でありつつ、風流と諸芸に生きた渡嘉敷ペークーの人柄がうかびあがる。 沖縄の人々が共通にもつイメージとして、王府に奉仕するまじめな役人 たちのなかにも、こうした「歴史上に実在した偉人・風流人」としての と言われている(前出『北谷村誌』)。 ペークーと格別に縁のない語り手 ある。これらの書と讃、また、ほかに伝わっている狂歌、琉歌もあった かもしれない。 語り手は誇らしげにおっしゃっている。明治十三年生まれのこの方はペ いはずだ」という「遺言」を残したという。調べてみたところ、 活躍ぶりを見なければならないのだ。 である。それを知るにはやはり、ひきつづき伝承 (笑話) の世界の彼の ペークーの像を聞き手に描いてみせる人たちがいる。それらを聞くとき、 くつかの家に残されていたが、さきの戦争のために失われたとのことで また、隠棲の地、北谷では、ペークーの書の掛け軸がい 実際監

_

でぃー、山に行ってね、遊んで来よう」と言ってね、(ペークーを)れているわけよ、王様に。ある日ね、王様がね、「でぃーペークー、頭がきれて、知恵がある......。それと王様に、首里のこっちに使わあのね、渡嘉敷ペークーといって、ジンブナー(=知恵者)がね、

「(聞き取り不明) なんでわたしに小便するねー」と言ったらね、「こ ーしたって。小便王様にしてもね、これはもう罰はなかったって。 ー するさー に (=小便をするからね)」言うたって、このペークーが。 のアササーはね、飛ぶときにはね、さささ、飛ぶときには小便ぐゎ って。ひっつかって。だから、あんさくとっね、この、ささ、取っ - 捕るようにしてね、ヤンムチさ 道理があたっているから。 あれは、飛ぶときは小便ぐゎーするって、蝉は。うん。だから、さ だから、王様も道理があたっているからね、罰もしなかったって。 て、(王様がペークーに)これ(=ヤンムチ)ひっつけるときにね、こ 大きいの ササー、アササーになるからね と行ったからね、王様んかい (=王様に)、「わん (=わたし) ねーア 連れていくわけよ。あんさくとぅ (゠それで)、ペークーもいっしょ ささ、(ヤンムチを) 刺そうとしたからね、飛ぶねーびして小便ぐゎ のまたペークーはね、小便したって。 あんし (=それで)、(王様が) んち言ったって、このペークーが。王様が下で、ペークーは木に登 これが、捕るねーびしみそーりー (゠捕るまねをしてください)」 なるからね、うんじょう (= あなた)、下でこのアササ アササーわかるねー、蝉、蝉の ヤンムチわかる? 黐、 うん

を聞いてみよう。 かりに「吸い物の蓋」と名づけてある話のがいて、おなじ語り手の、かりに「吸い物の蓋」と名づけてある話

から」んち、話に夢中なってね、あんしまたこれはね、「食べるといま)家から食べてきてもう腹いっぱいだから、もうあとで上がると、言うわけさーねー。あんし、(渡嘉敷ペークーは)「ん、なま(=ンブン(=知恵、工夫) して出すからね、「どうぞ上がってくらさい」呼ばれたからね、こっちご馳走出すでしょ。ご馳走出すからね、ジこのまた渡嘉敷ペークーはね、あれさ、お祝い事に呼ばれたって。

敷ペークーは。 敷ペークーは。 敷ペークーは。 からね、蓋はあけないですぐそのままかえてくらさい」んでい言われたって。 にまた、「もう冷えているからね、熱いのと取りかえてくらさい。 い言ったって、このペークーが。打たれたって、また。あっちはね、いったって、このペークーが。打たれたって、また。あっちはね、い言ったって、このペークーが。打たれたって、また。あっちはね、い言ったって、は夢中なってね、「いま腹いっぱいだから」んち、あもう話しぇーに夢中なってね、「いま腹いっぱいだから」んち、あきにはね、蓋をあけないで上がってくらさい」って言われるわけよ。

- ク- が王様と碁をうつとき、対等の友達のような口をきくので側役人 類例がないか、すくないものである。ここで、よく聞かれる渡嘉敷ペー ひっくり返ってしまった。反対側につけると今度はそちらにひっくり返 米俵をひとつもらった。それを自分の痩せ馬の片側につけたところ馬は こまった態度をとるので王様はおもしろくない。 わけを知った王様は側 めになった が低く造ってあったので、王様は頭を下げ、お辞儀をして入ってゆくは れている話がある。 クー話を通覧しておくと、たとえばまず、「王様のお辞儀」と名づけら い物の蓋」を語ってくださった。いずれも、渡嘉敷ペークー話としては また、「褒美の片荷」という話もある。 ペークーは王様から褒美として 役人を叱りつけ、ふたりはもとのようにして碁をうった に叱られた。つぎに王様と碁盤をはさんだとき、ペークーがひどくかし 渡嘉敷ペークーの話として、金城千代さんは以上の「蝉捕り」と「吸 これを見た王様がもう一俵くれたので、ペークーはそれらを馬の両 などと語られる。また、「王様と碁」という話は ペークーは王様を家に招待した。ところが、入り口 などという。

ある。クーと世間の人々との交際にかかわる話もある。たとえば、こんな話でクーと世間の人々との交際にかかわる話もある。たとえば、こんな話でであるが、辻や仲島遊郭のジュリ (遊女) とのあいだのできごと、ペーこうしてみるとやはり、「王様」とのやりとりをめぐる話柄が多いの

た。。(要約) と響れとおなじだ」と答えた。アンマーはなるほどと納得した。。(要約) と書いて持ってきた。アンマーはなるほどと納得したので、ペークーは「それでは書いてやろう」と言って、あとになって「蜘蛛の巣」と書いて持ってきた。アンマーは字が読めないのって「蜘蛛の巣」と書いて持ってきた。アンマーは字が読めないのって「蜘蛛の巣」と書いて持ってきた。アンマーは字が読めないのでそのままにしていたが、字を読める客が笑って「蜘蛛の巣と書いでそのままにしていたが、字を読める客が笑って「蜘蛛の巣と書いてある」と言った。そこで、ペークーがももい。アンマーは「地球の巣と書いてある」と言った。そこで、ペークーが形ってきたとうに、知蛛の巣と割いので、ペークーは「地域と関いでしていた」と頼んだ。だったので、ペークーは「蜘蛛は他人の手は借りずに自分の巣を作る。それとおなじだ」と答えた。アンマーはなるほどと納得した。でもうけたおといった。と言った。そこで、ペークーが来たときに「書いてください」と頼んだ。だったので、ペークーは「蜘蛛は他人の手は借りずに自分の巣と書いている。と言った。そこで、ペークーが来たときに「書いていている」と言った。そこで、カーはいるというにはいる。

るが、ここではとてもふれられない。また、ジュリに金をだまし取られ、これとおなじ話型で非常に卑猥な意味の書を書いてやったという話もあ

こうした話がまだまだある。話もしばしば聞く。 風流の人、渡嘉敷ペークーの一面を存分にあらわすめとになってこれをとり返す駆け引きの話など、金銭とジュリをめぐる

また、ペークーが北谷に隠棲してからの話である。

名である。奇行が多かったというこの人物は史実のみならず伝承の世界 る話が多々伝えられており、 城間に隠遁したというが、この「坊主御主」と渡嘉敷ペークーとをめぐい。 位二十四年め (一八二七) に渡嘉敷ペークーの住む北谷に近い浦添の で知られ、 あり、やられる相手が「坊主御主」ということになっている場合もある。 おなじ話は各地で聞くことができ、火鉢でなく急須、薬罐ということも 坊主御主」とは第十七代琉球国王・尚灝(一七八七~一八三四)の呼び クー は「この火鉢はどんな人にくれてもいつももどって来る火鉢だ。 の火鉢に食われてしまう」と、宮城は火鉢をかついでペークーの家 もその翌日も毎日来る。 一箇月半たって、「わたしの財産みんなこ ぱいごちそうになって帰った。(ところがその後、)ペークーは翌日 ねて、明けるとすぐに宮城の家に行った。そして、酒、 は喜んで火鉢をかついで帰った。ペークーは夜が明けるのを待ちか すいことだ」「それならいいよ。持って行け」ということで、宮城 欲しいというので、ペークーは条件として「わたしがあんたのうち の前の宮城ウトゥンナという人と友だちになった。ある冬の寒い日 ペークーが首里の役人をやめて北谷の勢頭原に隠居したとき、 あんたがいらないんだったらひき取りましょう」と笑った。 に行き、「もう火鉢いらないからひき取ってくれ」と言った。ペー に行くときに酒とごちそうを出してくれないか」と言った。「たや に火鉢をまえにしていると、宮城がやって来た。宮城がその火鉢を 沖縄の伝承説話の代表的な主人公のひとりになっている。在 この「帰ってくる火鉢」型の話もそのひと 肴を腹いっ (要約)

> わけであろう。 にかと結びつけられてゆくというぐあいに、伝承説話の増殖が見られるつである。 おそらく、さまざまな話型を核としてふたりの有名人物がな

Ξ

居の場面を彷彿とさせる話もある。たとえば、うである。語り手自身が芝居で見たという話もあり、また、いかにも芝話は芝居、「沖縄芝居」に組まれて豊かに発達したということがあるよほかの伝承説話にもしばしば言えることであるが、渡嘉敷ペークーの

の人もみんなアハアハーと笑って出て来た。(要約)の人もみんなアハアハーと笑って出て来た。(要約)にい、お膳、酒を用意して、飲んだり食べたりしはじめた。家やあ、おじゃまします」「マーサ酒あるよ」「それではごちそうにない」だってった。でれる」と隠れて、節穴からペークーがどうするか見な「隠れろ、隠れろ」と隠れて、節穴からペークーがどうするか見な「隠れろ、隠れろ」と隠れて、節穴からペークーがどうするか見な「隠れる、間である」と問れて、節穴からペークーがどうするか見な「とりが「正月のマーサ酒があるので飲みに来い」と言った。の人もみんなアハアハーと笑って出て来た。(要約)

「口説」を教えてくださる場合もある。言う語り手もいる。また、語り手が、芝居で使われていたペークーのれば納得もゆくのであり、実際この「ひとり問答」の話を芝居で見たとそうおもしろかろう。これがもともと芝居にかけられていた題材と考え各地で聞くことのできる、この愉快な話も芝居の一場面であればいっ

ていてい、マワシー本ひき回ーち、船手空手ぬ北谷かい(=船手の船手も一きぬ銭金ん、酒とう色とうに飲み使てい、残る小銭うち捨らない。

褌一本の無一文で、「船手・空手」の北谷へ行く) 毀職でもうけた金も、酒と色恋とに使いはたし、残った小銭を投げ捨てて、

もうひとつだけ、これもわりあいよく聞く話である。たというのである。こうしたペークーの口説はほかにもいくつか聞く。このせりふを吐いてペークーはジュリに小銭を投げ与え、北谷に隠遁し

わされているのである。ことがしばしばあったようで、渡嘉敷ペークーもその役割の一端をになおいて薩摩あるいはヤマトンチュを打倒・報復し、精神の安定をはかる

四六

クー像のさまざまな位相を見せてくれるものなのである。各地の民話集、昔話集におさめられたペークーの笑話は、こうしたペーるいは御伽衆を脱却し、多彩な人物像として成長していったのであろう。に流れ出すという循環のなかで、渡嘉敷ペークーの像は単純なる偉人あかくして伝承から芝居のなかにとりこまれ、さらにそれが伝承のなか

という副題をもつ続稿を用意したいと考えている。についての考察である。「沖縄・豊見城の昔話」、「沖縄・豊見城の伝説」稿は、豊見城市の民間説話資料のうち、「笑話」としての性格をもつ話以上、「渡嘉敷ペークー話 沖縄・豊見城の笑話 」と題する本

注

- 名を以て呼ばれるところの家々の単位であった。 に当たる。当時の「村」は「真切」のなかの各集落であり、現在「字」① 「真切」は琉球王府時代の行政単位であって、おおよそ現在の市町村
- あった著者もこの調査に参加している。② 福田晃氏指導の立命館大学・説話文学研究会による。当時大学院生で
- 「ガーナームイ 沖縄・豊見城の伝説いくつか 」(『人文研究』第一城の世間話いくつか 」(『人文研究』第一〇六輯、二〇〇三年九月)、(『人文研究』第九九八年三月)、「沖縄・豊見城村のに説『真玉橋の人柱』」 第九五輯、一九九八年三月)、「沖縄・豊見城村の「京屋節由来』(『立命館文学』五九九五年一一月)、「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』(『立命館文学』五九九五年一一月)、「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』(『立命館文学』五

〇七輯、二〇〇四年三月)。

- ⑤ 福田晃「総説・民間説話」(福田晃編『民間説話 日本の伝承世界
- グチ)が話されている。 語との中間的な位置にある新しい方言、「沖縄大和口」(ウチナーヤマト語との中間的な位置にある新しい方言、「沖縄大和口」(ウチナーヤマト実際にはこれらの発音が入り乱れている。なお、近年沖縄では純粋・本実際にはこれらの発音が入り乱れている。なお、近年沖縄では純粋・本実語の影響を受けた方言の発音で「とっかしき」、標準語の発音で「とかしき」、標
- ⑦(方言の発音で「うやかた」、標準語の発音で「おやかた」。
- ◎ 方言の発音で「かっちん」、標準語の発音で「かつれん」。
- 一九八四年)参照。 常田隆延「南島の笑話モーイ親方をめぐって」(『相模国文』一一号、

- ⒀ 『日本昔話大成』「笑話」でも「狡猾者譚」の大分類のもと、「狡猾者」いる。 『日本昔話大成』第一○巻「笑話」にも「狡猾者譚」の部をもうけて⑿ 『日本昔話大成』第一○巻「笑話」にも「狡猾者譚」の部をもうけて
- 社、一九八五年〔初版一九七〇年〕)「おどけ禅享の逸事」。⑭ 柳田国男『笑の本願』「吉右会記事」、大島建彦『咄の伝承』(岩崎美術と「おどけ者」の小分類を行っている。
- の動向」(注望参照)。 物田国男『笑の本願』「吉右会記事」、大島建彦『咄の伝承』「昔話研究」
- 渡嘉敷ペークー 話

- である。

 ① 尚敬王在位第三十一年の寛保三年は一七五〇年ではなく、一七四三年
- …? | 尚育王十七年という年は存在しない。弘化元年(一八四四)は尚育王|
- 『喜名の民話』一○四頁。これに先だつ語りは 渡嘉敷ペークーは、ころ?)はかつてペークーが隠居した場所である 等々。いずれ現地ある。また、同町美浜の、現在兼徳氏が住まわれている屋敷(のあるとよれば ペークーの位牌は本家が持っていて、墓は北谷町宇地原区によれば ペークーの位牌は本家が持っていて、墓は北谷町宇地原区にご子息の真栄城兼徳氏からいくつかの情報を得ることができた。それにご子息の真栄城兼徳氏からいくつかの情報を得ることができた。それにご子息の真栄城兼徳氏からいくつかの情報を得ることができた。それにご子息の真栄城兼徳氏からいくつかの情報を得ることができた。それにご子息の真栄城兼徳氏からいと考えている。
- も名人だから」(同五五三頁)。前稿で、沖縄において世間話は伝説・史一三代の尚敬から一四代の尚穆の時代だからね..... 武道も茶道もまた書時代の御用室でもあるしね、また鹿児島へ行って勉強をして、茶道とか時代の御用室でもあるしね、また鹿児島へ行って勉強をして、茶道とか高敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一嘉敷ペークーは、本名を渡嘉敷兼福といわれている」(『長浜の民話』一語の当時代に、公園)「渡嘉敷ペークー、彼は首里の赤田村に生まれた。尚敬王時代に、公園)「渡嘉敷ペークー、彼は首里の赤田村に生まれた。尚敬王時代に、公園)「

けではない。すぐあとに登場する金城千代さんも、渡嘉敷ペークーのこ は笑話もまた伝説・史譚と連続している観がある。なお、すべての語り 譚と接していると述べた (「宜保チマシー」、注③参照) が、かの南島で とを「豊見城村の人のはずよ」と言っておられる。豊見城村(市)に渡 手が話の登場人物について前述のような「歴史」的知識をもっているわ 嘉敷という集落があるためにおこる誤解かと思われる。

- 民館)。著者翻字。 一九九〇年八月九日 (木)、藤井佐美、組原洋子両氏採録 (於真玉橋公
- 民館)。著者翻字。 一九九〇年八月九日 (木)、藤井佐美、組原洋子両氏採録 (於真玉橋公
- 町史』別巻・西原の民話・二九九頁)。 「蝉捕り」については類話が一例 (梗概のみ) 報告されている (『西原』
- 26 「沖縄独自話型」とされる (『仲里村史』第四巻・四八一頁)。
- 「沖縄の独自話型」とされる (『仲里村史』第四巻・四八一頁)。
- の五五七「褒美の片荷」には鹿児島県、熊本県の採集例が挙げられてい る。こうした南九州の伝承からの影響は想定し得る。 『日本昔話大成』第一〇巻「笑話」「四 狡猾者譚」「A おどけ者」
- (三弥井書店、一九九二年)一六三頁~。 伊芸弘子編『沖縄首里の昔話 小橋川 共 寛翁のチティバナシ
- 四頁、『北中城の民話』五六六頁~、『浦添市史』第三巻・六四頁~、『那 覇の民話資料』第二集・八二頁~、『仲里村史』第四巻・四七八頁 しかわの民話』二一六頁~、『伊良皆の民話』一六四頁~、『長浜の民話』 '久志の民話』一四二頁~、『宜野座教の民話』昔話編・三四六頁~、『いく『瀬名波の民話』一二六頁~。ほかに、『屋部の民話』二三四頁~、『名護の民話』二〇四頁~、『羽地の民話』一九九頁~。 五五頁~、『波平の民話』七〇頁~、『上地・親志・都屋の民話』一一
- クーはその火鉢に抱きついて、離さないわけさ」と言っている。 このあ りのやりとりについて、語り手は「渡嘉敷ペークーが考えを違えたらた たりは、のちに述べるような、芝居の場面をことばによって再現するか いへんだからと、(宮城が)すぐこの火鉢を持って帰ろうとしたら、ペー ペークーがいったん承諾してからこの交換条件を言い出すまでのふた

のような語りの例である

- 33 『屋部の民話』二二九頁~。
- 34) ~、『渡慶次の民話』一〇九頁、『北中城の民話』五六四頁~、『沖縄首里 の昔話。一六〇頁~。 『羽地の民話』二〇五頁~、『いしかわの民話』一九七頁~、二〇〇頁
- らったヤックヮン (薬罐) が小道具になっている。いずれも注缀参照。 『いしかわの民話』一九七頁~。『北中城の民話』では坊主御主からも
- 37) 主との交流も語られている(別稿にて取りあげる予定)。 これまた伝承の世界で有名なウェーキ (豪農) の城間ナーカと坊主御
- 『北中城の民話』五六一頁~、『沖縄・糸満市の昔話』二一四頁~ほ
- 38 見城村の伝説『真玉橋の人柱』」(ともに注③参照)でもこのことを取り あげている。 へと逆流してきた。 拙稿「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』、「沖縄・豊 多くの沖縄芝居の題材は口頭伝承からとられ、また、伝承説話の世界
- 縄口」(沖縄方言)で演ぜられることが沖縄芝居の生命であると言えるのな素材をも取り入れて大衆的な演劇へと展開していったもの。全編「沖 な素材をも取り入れて大衆的な演劇へと展開していったもの。全編「沖維新・廃藩置県後に秩禄を失い、民間へ出てこれらを伝えたため、新た いう「組踊」がその母胎となった。組踊をになった士族の人々が、明治
- ヮンぬ按司」(卑猥な表現なので標準語訳は示さない)(『いしかわの民話』 見たよ」(『長浜の民話』一五四頁)、「これ芝居見たから」(『こちんだの 県史』 第六巻、 期間は八月二十日から二十六日、 セリフ劇」の演題に「琉球故事 昔話編・二一九頁)。池宮正治氏の調査によれば、明治四十三年の「方言 せりふの話しかた)を伝える語り手もいる。「出会ーちゃる者や、ヤック 民話』昔話編・三六五頁)。 渡嘉敷ペークーの「按司口」(組踊の按司の よあれは、渡嘉敷ペークのことは。 わったー (= わたしたち) あれから 「これは、あんたあのうよく芝居にも出ますよ、ね。芝居にも出ます 第四部「第三章 劇団は「沖縄座」だったという (『沖縄 演劇」二〇七頁)。著者はいまのところ 渡嘉敷親雲上」なるものがあり、上演

舞台、ビデオのいずれの「渡嘉敷ペークー」にしても観る機会にめぐま

- 『名護の民話』二〇五頁~。
- 民話』昔話編・二一四頁~、『儀間の民話』一六九頁~、『西原町史』別『羽地の民話』二〇〇頁~、『恩納村の民話』二二四頁、『いしかわの んだの民話』昔話編・三六四頁~。 巻・二九七頁(坊主御主)、『那覇の民話資料』第五集・五一頁~、『こち
- 『こちんだの民話』昔話編・三六五頁。
- 『久志の民話』一四四頁~。
- なじ場面を語るものと思われる。 注③参照 浦添市史』第三巻・六四頁~、『那覇の民話資料』第二集・八三頁はお 『上地・親志・都屋の民話』一一四頁、『北中城の民話』五六六頁~、
- 六十一歳で故郷に帰るときの口説に、「鳩」小ぬカマーにうち惚りてぃ介している(『久志の民話』一四三頁)。 また、べつの語り手によれば、 め、そののち、本文に引用したような、北谷に隠遁するときの口説を紹 ちぃ 世ぬあさましや……』」(さても憂き世のあさましや…) と語りはじ 良皆の民話』一六五頁)。 この語り手は、「この渡嘉敷ペークーの口説が、あるさ。『さてぃむ憂(鳩のカマーにうち惚れて......)」というものがあったという (『伊
- 『屋部の民話』二二七頁~。
- 『喜名の民話』九六頁~、『瀬名波の民話』一三三頁~、『上地・親志・都 屋の民話』一一一頁、『北中城の民話』五六〇頁、『浦添市史』第三巻・ 『久志の民話』一三九頁~、『恩納村の民話』昔話編・二二七頁~、
- 史劇
 モーイ親方」、沖縄テレビ放送製作)。 めぐまれず、ビデオに収録されたものを観ている (高安六郎演出 「 琉球 著者はいままでのところ舞台で沖縄芝居「モーイ親方」を観る機会に
- 「大和人」。日本人または本土の人。
- いはその主人の話(別稿にて取りあげる予定)もあり同様の役割を果た していると思われる。この話型に渡嘉敷ペークーが取りこまれるという 薩摩に連れてゆかれたが、その支配に屈しなかった琉球の名馬、 ある

現象もある(『久志の民話』一三七頁~、注戀の話の前半部分)。

注に引用した市町村発行の民話集・昔話集の一覧

名護市史編さん室編『屋部の民話』(名護市教育委員会、一九九〇年) 名護市史編さん室編『名護の民話』(名護市教育委員会、一九八九年)

名護市史編さん室編『久志の民話』(名護市教育委員会、一九九一年)

名護市史編さん室編『羽地の民話』(名護市教育委員会、一九九三年)

遠藤庄治監修・金城康長・照屋寛信・辺土名朝三編『恩納村の民話』(恩納 村教育委員会、一九八二年)

遠藤庄治監修・宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話』昔話編 (宜野座 村教育委員会、一九八五年)

遠藤庄治監修・長浜昭美編『いしかわの民話』(石川市教育委員会、一九八 四年?)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『伊良皆の民話』(読谷村教育委員 会・歴史民俗資料館、一九七九年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『喜名の民話』(読谷村教育委員会・ 歴史民俗資料館、一九八〇年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『長浜の民話』(読谷村教育委員会・ 歴史民俗資料館、 一九八一年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『瀬名波の民話』(読谷村教育委員 会・歴史民俗資料館、一九八二年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『渡慶次の民話』(読谷村教育委員 会・歴史民俗資料館、一九八五年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『波平の民話』(読谷村教育委員会・

歴史民俗資料館、一九八九年)

読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『上地・親志・都屋の民話』(読谷村 教育委員会・歴史民俗資料館、一九九四年)

遠藤庄治編『北中城の民話』(北中城村教育委員会、一九九三年

浦添市史編集委員会『浦添市史』第三巻 (浦添市教育委員会、一九八二年) 西原町史編纂委員会・遠藤庄治編『西原町史』別巻 (西原の民話) (西原町 役場、一九九一年)

渡嘉敷ペークー話

那覇民話の会編『那覇の民話資料』第二集(那覇市教育委員会、一九八〇

町教育委員会、一九八四年?)遠藤庄治監修・下田博美・平良尚子編『こちんだの民話』昔話編(東風平

一九九六年)

遠藤庄治編『仲里村史』第四巻 (仲里村役場、一九九五年)

クト研究)の援助による成果の一部である。研究A)、および、平成十三年度・小樽商科大学学長裁量経費 (プロジェー 本稿は、平成八年度、平成九年度~十年度、科学研究費補助金 (奨励

(小樽商科大学助教授)